

保育かながわ

発行所
横浜市神奈川区沢渡4の2
神奈川県保育会
発行人
富 田 英 雄
題字
故 内山岩太郎 筆

他山の石と上手の手から水

神奈川県保育会会長 富田 英雄

来年省庁改変により、厚生労働省となり、児童家庭局保育課は、雇用均等児童家庭局保育課となります。そんな関係で、七月二十四日に開催した県下市町の保育担当課長さん方との懇談の場に、労働省のどなたかを紹介していただくとうと、甘利明前労働大臣にお願いしたところ、御自身でお引受け下さり、国会のお忙しい折、わざわざ駆けつけて下さいました。まさか前大臣がお出になるとは思いもよりませんでしたので驚きと感謝の気持ちで一杯でした。熱心に御講演をいただきましたが、労働省が今後の保育のあり方について作業がどの程度進んでいるのかわかりませんでした。その後全社協の予対幹事会での情報交換の中で、現在労働省の一部のキャリアが、極秘で検討を進めていると聞きました。詳しい事は五里

霧中です。全社協の企画部長にも、労働省に情報源はないようなので、至急情報を引き出す様頼んでおきました。近いうちに少しずつ情報が出てくるでしょう。はやく情報を得て、対策をたてないと、子ども達にしわ寄せがくるのではないかと、いまでも焦っています。

◆児童福祉法が、すでに改正されているので社会事業法の改正は、それ程大きな問題ではありませんが、情報公開、乳幼児虐待の通告義務、苦情解決と矢継早やに対応をせまられ、おおわらわのことに思

います。又、入園を希望する父母や祖父母が、毎日見学に訪れる様になり、丁寧に施設の案内をしないと評判が下がるのではないかと心配で、対応に苦慮しているという話も聞きます。措置から選択になって、保育園は様変わりしまし

たが、更に保育園が様変わりするのは来年の省庁改変の時とも、平成十五年の障害が介護保険に入る時とも、又、今始まった後期のエンゼルプランが終了する平成十六年とも言われています。その頃、子ども保険ができて、措置費から変わった運営費がそれに取って変わるという人もいます。どの説が、一番信憑性があるかよく解りません。

◆最近の入園希望の母親が、十代後半から二十代前半の一人親家庭がふえて来ましたが、その中に、自分が育つ時、親からギューと抱きしめられたり、温かい言葉をかけられた経験がないのではないかと思われる母親がいます『躰のつもりがいつか怒鳴り声になり、だんだん興奮して子どもを叩く。しかし気持ちが落ちつくとき、叩いた事も思い出せない』そういう家庭での虐待が、母親の愛をいっぱい受けた経験がない事が原因だとしたら、保育園は、子ども達のオアシスでなければなりませんし、母親達にも精一杯の愛を及ぼさねばなりません。保育園の重要性が益々高まる所以です。

◆大和市の無認可施設で悲しい出来事がありました。保育園と報道される度に、身を切られる思いがします。全保協の制度・予対部会では、厚生省に対して、認可保育所以外に保育園という名称を使用させない、いわゆる名称独占を求めて来ましたが、厚生省はその意志はない様です。厚生労働省になれば、企業内保育所もある事から、名称独占はますますむづかしくなる事でしょう。私達は乳幼児の虐待は家庭内の事だと思っ

ていますが、旬日を経ずして受理した部長名の文書には私達の努力が評価されていない様に思え、ショックでした。

◆他山の石という諺があります。私達認可施設は、大和の事件は起こるべくもありませんが、「上手の手から水」ということでもあります。心して、子ども達の幸せの為に、子どもを取り巻く環境がより良い姿であるよう頑張らましよう。

21世紀に

第34回



祝いの大きな拍手がおくられました。
引き続き、来賓の方々の祝辞をいただき、祝電の披露後、式典の終了となりました。

総会

式典後、四階第一第二研修室において、冨田会長を議長に保育会総会が開かれ、平成十一年度事業報告及び収支決算、平成十二年度事業計画及び予算について審議がなされ、原案通り承認されました。
昼食休憩の後、館内三会場において研究発表・討議が展開されました。



「保育所保育指針を考える(一・二歳児)」をテーマに、「生活リズムを見直そう(い)い子育てのために」と題して子どもの成長発達で大切な生活リズムについて、保護者への実態アンケートをしながら、保育園と保護者の双方が、共によりよい子育てをしていくということが再確認されたという大和市保育士会からの発表でした。
また「あそび(ふれあいあそび)」として子どもを取り巻く環境の変化の中で、子ども達があそび、食事、睡眠の切りかえがうまくできなかつたり、ひとりあそびで遊びこめない・表情が乏しいなどの子どもをみかけるが、それぞれのふれあい方や遊び方がある。子ども達一人ひとりを見つめながら、発達をふまえた指・手あそび・全身を使った遊び等、実技を混えて藤沢市保育士会より発表されました。

第二会場

第三会場

第三会場では、「保育所保育指針と保育実践を考えるー0歳児ー」のテーマのもと、伊勢原市のベルガーデン保育園と大山保育園が「乳児の発達を促す遊び」と題して市内の保育士にアンケートをとり、0・1歳児の発達現状を踏まえながら、様々な問題提起をする中で、ダンボールという自然の素材を使った遊びを通して身体的発達を促したり、子どもの表情の豊かさや意欲にもつなげていけるという実践活動の取り組みを、また県保育士会保育内容研究会では「0歳児の食事と環境」と題して子どもの一日の生活を把握した上で保育所という集団の中の離乳食のすすめ方や、咀嚼の獲得、楽しく食事をするための環境づくりの大切さをその時期や段階を細かく追いつめながら実際の子どもの様子、反応をとらえ、再確認できる実践研究をそれぞれ発表されました。

夢を託して

保育事業大会

保育環境の変化や諸問題について相互理解を深めると共に、来るべき二十一世紀を担う子どもたちの育成と保育所のあり方をどう考えてゆくのかが、「子どもを産み育てる『夢』ある社会をめざして」を大会の主題として、保育関係者が一堂に会し、子どもたちの幸せを願って研究討議がされた。

第一部 保育を支えて

式典

去る平成十二年五月十三日(土)第三十四回神奈川県保育事業大会が、県社会福祉会館に六百人近い参加者が集い盛大に開催されました。
式典には多くの来賓の方々をお迎えし「花のおさなご」の斉唱、児童憲章の朗読に始まり、冨田会長より、本大会の関心の高さの顕著さとその開催の意義について主催者側からの挨拶がありました。
表彰式では、永年本会発展のためにご尽力された前副会

長 岩澤貞吉先生に顕彰状と記念品を贈呈、続いて永年勤続された百三十三名の方々の表彰がとり行われました。
さらに保育事業に対する多大の功績により、叙勲・褒章を受章されました野田タカエ先生、小林洋子先生、西海延江先生、重本和子先生、出縄いく子先生、小久江富美子先生、厚生大臣表彰を受賞されました望月郁文先生、徳永佐代子先生、また神奈川県保育賞を受賞されました川井保子先生、福田恭子先生、横原信子先生、石川喜多子先生にそれぞれ記念品が贈呈され、お

第二部

保育の向上をめざして

第一会場

横須賀市津久井保育園の了戒園長の発表は、市全体(公立十三園、私立二十園)のアンケート調査にもとづき、現状を把握され、分析の結果今後の職員養成に求められている方向性を見出し出していた。
また保育時間の多様化に伴い保育士の週四十時間勤務の中での研修の難しさがあると発表された。

平塚市明石町保育園の園田園長の発表は、求められる保育所長の役割として、まず基盤となることは、園長と保育士との人間関係であるとし、職務基準を正しく評価し、新任からベテランまで仕事に応じた賃金が支払われるべきであり企業の考え方も必要であり、年功序列は廃したい。
また保育士の養成に園長として限界がある。他施設での



研修に委ねる場合もある。いずれも会場は、真剣に質疑応答が交わされ、熱気が漲っていた。

中堅保育士研修会

『新しい時代の保育サービスと
保育士のあり方を学ぶ』

雨・風の強い中、六月二十八日(水)に神奈川県社会福祉会館ホールで開催しました『平成十二年度中堅保育士研修会』は、県内各地区より百三十名余の参加者で、熱気と期待に溢れて開会し、午前二講義、午後二講義が行われました。

第一講義は、厚木市児童福祉課・子育て支援センター主任の石橋優子氏による『わが街の子育て支援センターの活動』と題して、厚木市総合福祉センター二階で開設して三年目になる、子育て支援センターの役割や事業内容について報告されました。そして、センターの利用状況や相談事例を通して他機関との連携や子どもと共感できない親達へ

の支援の必要性を訴えられました。第二講義は、神奈川県福祉部児童福祉課・副主任の井上従子氏による『保育をとりまく諸問題について』

時代の要請と保育制度の改革整備と題して、神奈川県の子小児化問題や保育ニーズの状況が報告されました。そして、福祉サービスの三本柱である利用者本位のサービス・質の高いサービス・身近な地域サービスについて説明し、苦情処理や規制緩和、「児童虐待防止法」の整備や今後の課題を示されました。

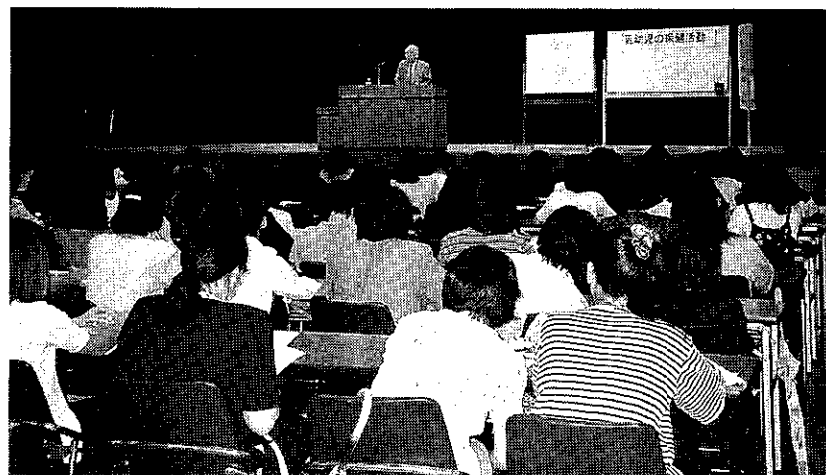
がより幸せになれるか」といふ県保育会四十年のテーマを基本とした内容でした。「苦情処理」の問題には、人的環境等を整えることの重要性を述べ、親と子育ての共感がで

きる保育者になるよう、具体的な日常保育の一例を取り上げての話は印象的でした。また、当日の朝、大和市の託児所で負傷や死亡の虐待報道があり保育者の資質について考えさせられました。

第四講義は日本保育園保健協議会会長・こどもの城小児保健クリニック院長・医学博士で、小児保健分野の第一人者、巷野悟郎氏による『乳幼児の保健活動』について、保育指針の改訂内容を考慮しながら、わかり易く話されました。

た。育児は自然との関わりを中心に昼と夜の「生活リズム」を重視することや、子どもの健康はよく動くことが大切であることを説明されました。そして、乳児保育は寝返りや乾布摩擦、赤ちゃん体操等の刺激が必要であることや、「食」と「ことば」の関係等興味深い内容でした。また「早寝早起き」を基本とする生活リズムは「食」を中心を考えることや、熱・下痢等の『症状』の考え方や薬の扱い方、そして、アトピー性皮膚炎について問題提起をしながら基本的な考え方を教示されました。

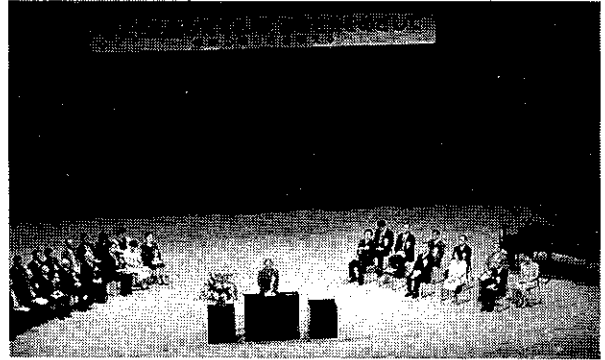
然にかえれ』は、昼休みに完売となり、先生の講義への関心の高さを感じました。巷野先生はNHKラジオの子育て電話相談を担当し、厚生省の仕事も多数兼任され、大変ご多忙の中、貴重な講義をしていただき、参加者一同大変有意義な一日であった事を感じ、終了しました。



子どもを産み育てる『夢』ある社会をめざして

～保育のあり方を考える～

第41回 関東ブロック保育研究大会



雄大で表情豊かな山々に抱かれ、渓谷や湖も数多く自然の宝庫を唄う山梨県甲府の地に於いて、七月五日～七日、第四十一回関東ブロック保育研究大会が開催されました。

「夢・未来・子育て・二〇〇〇年in山梨」と明るくさわやかなスタッフの笑顔に保育関係者約千二百名が迎えられ、幕を開けました。

大会初日、開会式後、「少子化の進行と改訂保育所保育指針」と題して、厚生省児童家庭局保育指導専門官、小西哲郎氏から行政説明がありま

した。少子化が進行する中、その背景を踏まえて男女共同参画や家族政策の推進の実現と共に、全社会福祉として、又認可保育所として利用者の利便性の確保や、情報提供、ニーズへの十分な対応、規制緩和などの問題提起がなされ、更に、保育所保育指針の改訂を通して在宅児のケアや虐待への介入についても説明がありました。

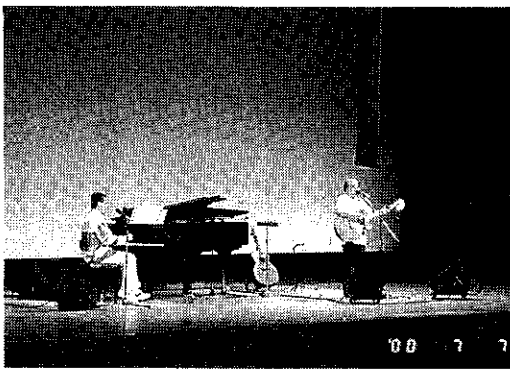
続いて山梨県保育士会八十八名による和やかな民舞が披露され、更に、日本航空学園付属高等学校の学生による勇壮な和太鼓の演奏、息のあった勇ましい和太鼓とやさしい笛の音色に参加者も大いに魅了されたひとときでした。

大会二日目は、石和温泉の各会場、九分科会に分かれ、それぞれのテーマの下に、熱心な研究発表、討議、情報交換が行われました。第二分科会では、「職員養成と保育園長の役割」として社会の動きを見据えながら地域に開かれた保育所を目指し、職員の継続的な啓発、指導と研修の体

制作りが園長に求められているとして横須賀市保育会から長井婦人会保育園、宮田丈乃園長より発表がありました。

又、第六分科会では、「生活リズムを見直そう」として大和市若草保育園、渡部チイ子保育士が1、2歳児の生活リズムの実態調査とその研究成果を発表することができ、再度アンケートをとることで更に有意義な研究となるという助言者のコメントも頂きました。

大会最終日は、会場を初日と同じ県民文化ホールに移し、松戸市より「子どもの人権とジェンダーフリー」子どもと



大人の自立に向けて」をテーマにふりーせる保育の実践研究報告が行われました。自由・自信・安心をもって生きるという理念を保育所の保育の中に生かしながら子どもの自立につなげていくという保育計画、実践は課題を残しながらもその成果は評価されるものとなってきたとのこと。これからの更なる実践研究に期待の大きい発表でした。

続いて、二本松はじめ、中山譲両先生によるメッセージコンサートが行われました。「笑顔がかさなれば」というテーマのとおり、お二人の絶妙なトークに会場が笑いで一つになり、更につながりあそび・うたを通して人間としてのつながりや生きていくことへの実感や共感を伝えられ、心温まるやさしい気持ちで終わりを迎えることができました。

大会宣言決議後、閉会式に入り、次回当番県の静岡県より、「また、来年、静岡で会いましょう」を合い言葉に三日間の幕を閉じました。

児童福祉主管課長・保育会連絡協議会開催

労働政策としての子育て支援策を考える

今年で十回を迎えた「県下市町の児童福祉主管課長を迎えての連絡協議会」は、去る七月二十四日、県社協に近いホテルリッチにて行われた。各市町児童課から十五名余と、県からも、小野福祉部長、赤川児童福祉課長他のご出席をいただき、講演には前労働大臣の甘利明先生をお迎えしての開催となった。

私たちに恒例の感があるが、冒頭の主催者代表挨拶の中で、富田会長は、こうして回を重ねることの価値や意義の大きさを、あらためて強調され継続の要素となる行政の積極的な参加を呼びかけた。

また、この挨拶のなかでは先の大和市の事件における県の認可保育所への対応について言及し、小野福祉部長に保育会として、認可保育所の信頼性への県の適正な評価を求める要望書を手渡した。

これに応じ小野部長からは、児童をめぐる一連の不祥事への対応に追われるなかで、県としての決意を表す意味でも議論の末、あえて配慮を求め

たものであるなど、県としての方針が述べられた。

甘利先生の講演は「労働政策としての子育て支援を考える」と題し、前労働大臣としての子育て支援観を次の様に語られた。

わが国における少子高齢化傾向の現状及び未来像については先進国の典型であるとしながらも、急速であり将来的に

- ①労働力人口の減少
 - ②現役負担の増大
 - ③市場規模の縮小
- などの問題点が発生する。21世紀中に人口五千万人を切る

とすれば危機感はかなり大きい。

一方、女性の社会進出は、育児に対する負担意識、晩婚など、少子化を助長する結果となっている。しかしながら、このことを否定したり、流れを元に戻すことは出来ない。育児と仕事の両立への環境整備が必要である。

これに対する政府の取り組みとして、新エンゼルプランの策定などが行われ、労働省でも、ファミリーサポートセンターの制度を発足している。また、男女が共働して子育てや家事をしていけるよう、まずは、男性の意識改革を含めて固定的な役割分担を排除して行くと言う国民運動を展開してゆくべきであろう。

終始、女性の立場に立った観点からお話をされ、質疑応答の中でも、人口問題や種の保存は、すべてに優先する程重要ではあるが、女性が自己実現、社会進出する事を否定はできない。両立する様最善の努力をするつもりであると強調された。衆議院議員とし

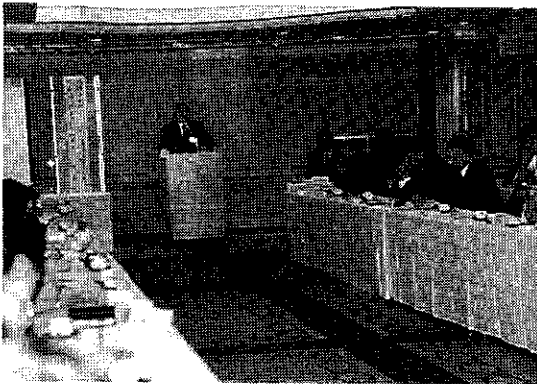
て、社会をより良くしようとする力強さを感じると共に、少子化は社会全体の問題であると再認識した。



この後、小田原市からファミリーサポートセンターの運営状況について、小田原市の佐藤隆司児童福祉課長補佐に事例発表をしていただいた。

まさに、『保育施設と家庭のすきまをうめる。』というコンセプトのとおり、昨年十月の開始以来、着実にニーズに添えている様子を伺った。

懇親会では、触発された活発な意見交換風景が見られ、真夏の熱い一日となった。



大和市子育て支援センターの取り組み

「大和市子育て支援センター」

大和市子育て支援センターは、大和市の中央に位置し、(小田急線相鉄線の交わる大和駅より徒歩十二分)草柳保育園内にあります。元用務員室だった部屋がピンク色の暖かい雰囲気と改造されています。国のエンゼルプランに基づき、平成十一年十二月一日にオープンしました。職員は、黄色のスカーフを首にして、青又は桃色のエプロンをしています。利用時間は、月曜日から金曜日の午前九時三十分から午後四時までです。時間内でしたら、お母さんとお子様との都合の良い時間に利用いただけます。

飲食はご遠慮いただいておりますが、夏場の飲み物、又ミルグについては持参していただいております。

開設時は「相談者の行く所」というイメージが強かったように思います。親子サロンに



遊びに来所された方の中には、親と子の二人だけの生活に疲れ、子育て支援センターに着くと、「もう、動きたくない」と言う感じで子どもが母親のそばに寄っていき、「あっちで遊んでなさい」と払いのけていきましたが、最近はいろいろな方と接しながら、子育ての話をしたり、買い物のお話をしたり会話をするのが楽しくなってきたようです。

子育てについても今までは、一人で悩んでいるだけでしたが、今はここに来ると、ここに来所しているお母さんや子どもたち皆で育ち合っている事が感じられます。

恥ずかしがり屋だったお母さんが初めて来所されたお母さんに先輩ママとして、話を聞いてあげたり、隅の方で静かにしているお母さんを見つ

けると声をかけたり、子育てのアドバイスをしたり、お母さんたちが明るく生き生きとしてきたのを感じ嬉しく思っております。

保育園と併設という点では、保育園の子どもたちの生活が、地域のお母さん方の良い刺激になっているように思います。

例えば、夜型の生活の子達は、午前十一時頃によく活動時間になりますが、保育園の子ども達は、ひと遊びを終え、昼食の準備をしたり十二時過ぎにはお昼寝に入っている。そんな0

歳・1歳児の様子をみたり、聞いたりしていく中で自分たちの生活の仕方を振り返る良い機会になっています。

夜型の生活をしているお母さんには、朝自然に目ざめられるよう窓を開けて気持ちの良い空気を入れることをすすめています。又離乳食で悩んでいるお母さんたちに、保育園の食事を見学及び試食していただいております。

スプーンに慣れず、困っていたお母さんは、保育園の子どもたちの手づかみで元気に食べる姿や保育士のゆったりとした接し方、考え方、ひとりひとりに合った与え方をしている姿に「ホッとしました」「肩に力が入っていたのか力が抜けたら子どもも食べるようになりました」など嬉しい感想を沢山いただいております。

大和市子育て支援センターは、沢山の方々に支えられ、ようやく歩き出しました。「大和市で子育て出来て良かった」と思える街づくりをめざしたいと思っております。

各部紹介

総務部

一連の制度改革も良し悪しは別として一応の落ち着きを見せる中、本会の三大事業の内、保育事業大会、市町連絡協議会も無事に終わりました。この中で一つ問題として気掛かりな事は、制度改革から生じた規制緩和の悪い面と悪い面をこれからの保育の中でどう仕訳して行くかこれは私達県保育会において課せられた大きな仕事であり総務部は会長の指導力のもとにその役目を果たしたいと思えます。

予算対策部

少子高齢化が続く中、これから認可保育所として何を求め自分達で何をしなければいけないのでしょうか。国は今、色々な法改正や規制緩和、特

調査研究部

会長より保育事業大会の内容を取り纏め、全会員に配布する様にとの指示が出されていますので、その実現に努力したいと思えます。

会則を見ると第三条に調査研究に関する事項を、会の事業の第一に上げています。

この部の重要性を思い部員一同頑張りますので、宜しくご協力お願いいたします。

研修部

今年度、多様な保育ニーズに対応できる職員の資質向上を目指し、次の研修事業を推進していきます。

中堅保育士研修 (6月28日)
主任保育士研修 (12月1日)
調理員研修 (1月23日)
園長研修 (未定)

広報部

今年度前半の神奈川県保育会の活動をご紹介します。保育事業大会、中堅保育士研修会、関東ブロック保育研究大会の報告や前号の小田原市のファミリースポーツセンターに引き続き、今回は大和市の子育て支援センターのご紹介をさせていただきます。これからも、親しみやすく、必要とされる情報提供の一手段としての広報誌を目指して、『保育かながわ』をお届けしていきます。

ていきたいと思えます。

公立 専門委員会

公立保育園のあり方が厳しく問われている昨今ですが、まずは各地域の実情を交流し学び合うことから始めていきます。民間園の諸先輩にお知恵をお借りすることも多いと思えます。よろしくお願いいたします。

編集後記

ミネリアム・変動の激しい年と言われている。

県保育会の委員も八割がチェンジした。

広報部員も、部長初め九割が入れ替わった。

新しいメンバーの感性で「保育かながわ」にも新しい風を入れることが出来たらと願っているが、県保育会の事業・予算・発行回数等の関係から急な風向き変更には、相当なエネルギーが必要である。

今までの良いところは踏襲しながら、ホットなニュースをタイミング良く、また心とむよな記事も織り混ぜながら魅力ある紙面にしよう、部員が力を合わせ、努めてまいります。

会員の皆様も、そんな記事がございましたら、奮って投稿下さるようお願いいたします。

最後になりましたが、53号発刊にあたり、お忙しい中、寄稿下さった皆様に心からお礼を申しあげます。

保育所問題対応のための 協力金のお願い！

※同封の協力お願いのとおり趣旨をご理解
いただき、よろしくお願いいたします。